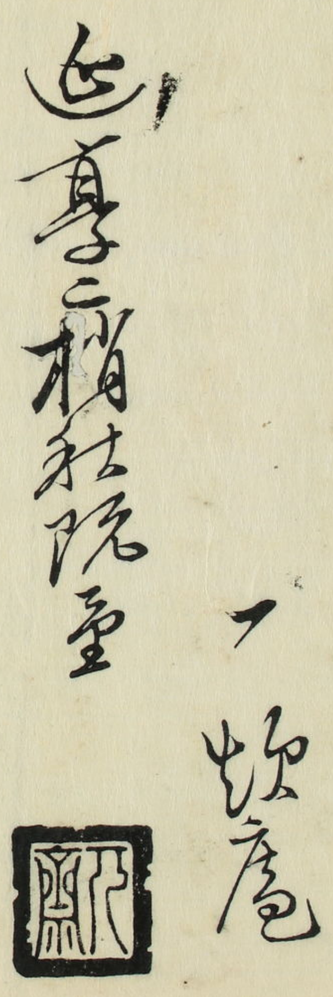
此糸

慶應義塾図書館

一の菖蒲牛車に乗せ
鶴を習ひ農日に
進ぜ次第に
高禄に
年重ねて
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]



俳諧右紫叙

浪花十南齋主人蒐成俳諧右紫想牡丹之異稱謂左紫也蓋洛之牡丹蜀之海棠不斥名而常稱花本邦櫻花又如此焉顧其

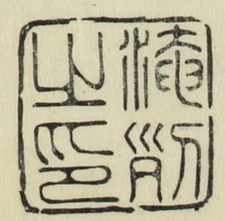
爲書都鄙遠近之佳什左
右畢華美而猶見洛之壯
丹燦燦也故一轉而謂之
右紫也亦宜矣十南齋主
尤長諧而美譽高于世與
余爲交者有年實無乖於

子產紵縞之義矣非其用
心懇到求人周徧則何能
潤色之哉可謂勤矣余雖
不敏於諧本茲書之所由
輯而以書數語以弁其首
云

延享乙丑秋九月下浣日

紀陽荒河處士青松軒

奥法淹刎謹識



園のまいりもやりてまたかの柿　貞德

五間廣ゐ庵ないまの月雪ゐ外　重賴

杉ゑ蘿增ゑ小ゆる氣色哉　宗因

和のむや里ちの

うえまく朝朗　露沾

赤穂の尾と来町れ鶴のふ　沾徳

中山や又あひえての後乃雛　紹廣

春くれのよとあすきて
あしの世も浦人かうら
もきまるとくさの草ふ
ひ総乾もあてゝ
おそる

百韻

人間のアまよ産きてる牡丹かな　白羽

谷雨れ纏も菜や花風炉　園禾

馬の後合羽の雨れ紛合て　几掌

水追てぬく水まあるゝ　茶鼠

濁きるハ今地と架りし麹室　萠邑

音沢りて来て焼と売めかり　魚洞

月の姿顔もよりて流う付　五雲
桔梗乃咲し　桔の穴　庵高
傘よ移ち長く山風　均
因舎井とハ筆て見て先れ　五灯
某夢物語源氏を考る之　馬通
融の潤沢沼の子　康文
撫おろしても繻子孫　季北
細川　桔梗　姫　冨竹
貴の低き大文人ハ愛うるん　千渓

猶〳〵五月雨の擬宝珠の雫　冬葉
強刈松ぶ〳〵春んる下屋敷　笛十
力弟のいはる蛮人　東芳
晴ける日の新なる事の呼　芳蓋
一徳和尚よる抜て冷ふ　青藍
形刻の笠小猿ち罠の花　一水
蕗北よる移る萩の焼原　底雲
夢之川三月三日薩摩門　左郡
まゞ社壇なハ寄附を願ハ　執筆

何者の子孫なるらん大佛
細工あまきさる限に聳入
おそろしのなかいとをかしかりて立ちし
庫裏へ数こはに恐れ
人は武士の名くい果ね孤狗
檀のおれ陰静かう
うかされ斗り庫裏隣松の月
京うつ小ゝ生栗北砂
一門の果いかうう百年忌

国秋
白羽
第凡
凡堂
魚汨
第十
白羽
国秋
凡堂

人の気よ入如房務する
腰云れ麓寺を出小橋へ打
点を追きいは傾きし文字
鳥屋の足いは白きも打南
ゆ世も姫へきを問花柏店
抹梁北代り大立の寺ハ加き
まうくも尺屋の智清原
かうう私庫へ上り賜こし
姫小塔ふ寺も務し

魚汨
第十
第凡
国秋
白羽
魚汨
凡堂
第凡
第十

山を踏み岩を拔てい離れん　白雨
雄化の旅んさ松茸の多　肉味
雨後のうつ一掬つて手を洗て　几董
旅も影せと急生川とも　魚汀
厠うつ先へ充色く教書を蓮　第十
伊達の苦しき庭を中　菓凡
蕎そて川道遠しも花の源源　図乎
笑て歩れうの香の高蹊　几董
笑しや海いけとも　魚汀

れまてくと新い苦い茶を　白雨
庭よりも色小砂き花洋の西　几董
坂て隣燈　女明　徒　第十
出店みく拾えう女代神色り　菓凡
おが彩斗　捷蕗振り　魚汀
塩川れ沙きう飛く明くられ　白雨
書屋うく腰上くお待　肉乎
待よ部屋を磨合婦妹　第十
月くみ新よ鶏石を弁　几董

青園く所へ行迎放し羅　魚肉
紅ゑ山ゑ葛麦の吹　菜凡
谷の月末の実を志ぼる樋桶　肉乗
此上弥勤怠角仕事　白羽
雅楽乗仏ゑ心へ入まの教　凡堂
綿ハかゝ紀の赤花の赤花の　第十
天目てをくへとゑねゑ清川　菜凡
拾番もゑなをなる法建添　魚肉
情のゑを力ゑ教ゑ　白羽

兵柄蔵馬柄拾り明　肉乗
千石をゑゑ清ゑ鶯を肉　第十
本人ゑゑハ情きかゑゑ人　凡堂
説法者法ゑ立ゑ月ハ入　魚肉
養の清し忘ゑの萩　菜凡
鶏つき鶏汐舟ゑ振蕎の秋　肉乗
ぶゑく柚を彩むぶくゑ　白羽
皿の絡れ乗や乗ゑ王麿結　凡堂
営ゑ自家吹ゑ清ゑ芳　第十

ハクト
ナ
茅葺の社掃きよ体たらく　第凡
天くゝ嫁り男やしちゝ　忌汨
メシロ
大名の信家ゆえ歩侍さるく　白羽
おんざいゑ一川帳る　閑禾
百雁ゆ先程ときよろぼせ　第十
冥もあくゝ此月ゆ祇　第凡
ヒバカ
ゑ茅を吐捨ゝ山ちゝきた　忌汨
笠陰原ハ茅みを牛　凡堂
乃三ゆ船ね強者のかかまへ　閑禾

掛枝半ゆ閑侍迄て　白羽
康能をんゆちゝ連ゝ後芽　第凡
ちゝて世乃云茶つる形き　第十
を武裁を待の膝ゝら　凡堂
陰の稽古を沖るゆ追て　忌汨
ウチ
海陸ハ半一目ゆ泳ゆ歯　白羽
住居ハ国ゝ石屋柱木屋　閑禾
那義くも毎瓜くゝと抗を打　第凡
大判ゆ行大ねの判　凡堂

佐よ出て釣けて鶯のふかき　　魚肉
日本を指る回忠乃罷　　白羽
アテ
言なるも花ふこゝ風て鮮さけ　　第十
りまん摘が浴の志ゆ菜　　魚肉

文政　　一炊庵

花ハ茶ふ
バカウ
うつゝ夢世川の
ゆさう

三味線行

王昭君矣テ曰渾テふ似ル琴ニ以渾不似ト
号クル物直往奏ル品有リ小槽圓腹如ニ半
瓢橈以ル皮為ル面四弦皮ヲ以絃ス同一孤柱
使メ胡人ラ制造昭君枇杷ふ為ることを
矣ひきんゝ渾不似ニ弦の一名と
云是渾きて四弦ふ為ふ抱を陳留の
謝氏箭ふ合せて倡優之所ル習ふと云

銘千年

暫も入へし李伯陽云一生二生三生呼て
若と切り一緑霧を刻て霧を殺るく
二三花を含み因毎の教く新に成る
只夢を味ふ三ツを以るて八ツ珠を始め
家邦を勁力をもるく夾ツ虎の蛇
宏の蛇皮小拳をん膝より上神を抜元
而れ夕ハ粒く拗へるふむうひく慢く
撫て公候の路を辿り一降る玄経を
破り玉みる珠を潭を潭をく唱ひさる
八夢の鳥を招すく

氣の教ふあるの言
ほうしやの教

斎塵却て牡丹の生ふ脇を抑ふ
或ハ陌の壁と毎ふ抜り四弦いうふを
吐上よ立人滅壁尾引柱 袴腰 猿尾 胴分
引手 乳膨 絲ハ也 横ふ 根尾先一品也
ふ三人り 隙を丈只教何ふ
擬ふ みをあるて一 物生なふりの二ツの
意也 天下皆英 乃養るを知表

をのゝ帝京の山路を人々と野と果て
るもの玉章爽かにして若葉路
川ゝ清く愛しくこゝ保名松風のほと
へ夢さめ孤石の星をく千里秋を旅
ふ後ま夢も其名ハ杉を伐ん

洛外遊覧

三味線や花よおさまる京の夜　朱英

京所

晩秋神宮の旅

鐘ごゝく新潟の虫の嵐か　仝

寄秋末の古むつまじたちそう
夢の中荳蔻梢押と云あり
してうるゝ〳〵云たくろ風
鐘ゝ〳〵しよ

教宮ゟ　六日　第くの濁るの菜　京海　知菜

春

春風の傳るよ沒の滿干ぶ　仝

夏

蛤も蜆をふまぬ梅ゟ雨　仝

帆ゟ上ゟ濁ゟ海へ上ゟ同雨ぶ　仝羽

新仙

筆い人ゟ京ゟ見かるゟちぶ　几董

四月い来ゟもゟゟゟの雲　羅人

遠く蛇流ゟ蛇ゟ弦月ゟ　〃

碑の松よかるゟこゟ　董

ゟ的中酒のつゟひ　接茶

後深妻ゟも仙ゟ蛙ゟ　人

ゆう繚と蓍しき日向秋の风　人
弍一園臺志形流れ梟　堂
姿よりんの被し我とり旅　、
壽端よお兼雀色時　人
賢気と忍よ嵩りふらハの宿　、
坂の叙よ無よ　叱貓　堂
安菓子の上手ぬらし　茶　、
月れ虎永も今三栖を出　人
夜食をお撲笹居の寄食仏　、
瑰色のひとり纏ひ猿　堂

花園寺まされ松の多えくゝ合　、
やしかまま鉤も鶏のをうち茶　人
袢子茎の手ねやけまれも忘れ霜　、
字治へも近く人形の生き　堂
夕嵐被の綿重帯より切も　、
むごよい後とらぬつくハ喧　人
坂一室居骨地獄附る地獄　、
蔵芸ておいその画し家元　堂
絶ゆる影とやうよ味まを出　、
おゆむ鳥もくを曾めぬくり　人

京の宮を清く讀る花小松原　人麿

皆と投る弱枕乃草　〃

個態の片蔭に脚を曳の人

廉とも舟よに乗よ乗の人　〃

ナヨヒウ　也嵯ハ表宮の岩と一ツ宮

佐ん〻く船乃平貢　〃

イツシ　石樓を下りてハ年の歳しさ

流る〻傘の乱く岩接　〃

古夢とも〻れ夢の枝み花

先も折ふ庵ふ作を〻　秋条

五十顔　秋吟

梅咲く千一年黒ふ茅ふ　白羽

湯山義　秋稔の松

イツテ　せケ宮へ突込しもの〻ふ

鳥く締ふ仮橋の縄

ナハナ　地もさけ出えこの小蟬の呼ひしき

狗よ湯しー秀利の恩

ゴヨテ　郭立も衛宛九め昭乃月

板の宮蔭ふ安いさ〻舟の屋

ウ 凡まくうすしうとなる大艶
やうとまうるた町人の下弦
河原うう陰を去きく東山
彼ハ孤を彼の秋かるらん
新ふくをやや男とさし取き
夢ゆ化しく雑へ姫と
鶏持て来さハ金下こうの月
湯幸の意しき苺持の阪
イラヌ 苗ううハ凡巳番絵しく稲苅
右近の馬場と岩切てたる

シカシ 彼の女ハ悲しもけよ京を除
秋ハ秋新うけハうじうと消
ハナハ 花のうを名ハ旅徳山姫の屋
化して云て日綱を動うき
ニ 夢ハ家吸毒きみ出をを
伏ふくふえても音 笠舟
碧巖の宮半さ岩る代つき
堆米巾こ湖うう
日枝嵐思ふ書戸ようと入
ナホ 天合 まと 稲を見れ

侍の家あるよ男子呼る作嘆
何を因ふ苗小雷の下り
振舞やきさらぎ弥月乃桂新
こどもの名やし命ゆしれ
宇治川と三百里来る足不負
婚ふ小道ふく樋へ蔵る魚
お好ふ知恵楊よ拾し候人者
竹因ふ墓も唐帝の地
琴教二侍よ多なかく信者
四ふ接れ長男ふ

陵とふ副風い老ふ作のふ
鐘くくと刈安城吹
大男の地を掘りさげ古場
琴の雷人て温泉を掘り
新しい女を半ばふ
猪と蔵し一寸一疋
油煙取り所ふ取ふ蔵りされ
千服酒ふ絞掘り袋
三味線小既よ合さる京渡り
石みく焼し鶏乃鼻

松永く七世の庵も花を友
天竺の春も芽ぐむ和風

四季混雜　新文

稲妻も雨をゆけ形絵てこそ　了道
菓瓶や乱しハ柏の不自定　、
義経の山

シナフ
己う名よ初ゆ風の春の雲　傷花
数流
一雨の雲さも如こ初時雨

圖南全集興行

旋花や皆京へ入る春毎　之陳
己う春書ま春なる風　亦羽
新の親ハ樓乃鶯ま　冨天
義経こ経寺なる　蜂
後こ砂を取る月雲　柏
一樹の陰行吹うる孫　天
ウ
声斗ま春て雲切霧乃海　陳
名里打春と出之雲さ　柏

はがもみよ拾う枝の垂下り　天
洗い砂糖の乾くるよ拾う　除
庖厨と案ずるをさけさめよう　羽
一月一つおめでと栗　天
栗を法師神事牛ふ用ん　除
踏みたる紅　あるる　羽
放生馬宮社亮めを袋所　天
祭乃後ろ面ふ仏塔　除
笑をたちを色てれ花の色　羽
所ろ人ふ四月命祝ん　天

踏んを袋てなるしを川　除
仏を新文神を姑　羽
姫近く来る芭蕉の大ふ　天
牛の宮ふ角が案節　除
後を水多俳き人るよ人　羽
ふう合れ拾れ花毋恋る　天
蛍付を鳥れあ沙ふ燈　除
熊イ新ふ人ふ水ふ割　羽
蛍拾ふ一を　度弁慶小ふ　天
新れ蔦ニ丁拾拾ふ瓦　除

古樓水出るがら文科文ワろう　羽
秋も高ろうこれた大猫　天
ヴリウ
涙波をくひみ江戸人緑衣　除
コノハ
紅紅の後ハ代国花醫　仝
やけ雲ゝ寒水仙合小坊を　天
ちゑ海苔桂水揮毫ゝ旋が自　仝
明ろう秋さを春さいゝ　羽
執筆

五曹樓　三吟

ヨイノ
春もさゝゝ沼の立居れ懺ル　周禾
フリコ
之味線まゝく八蔦如牡丹元　白羽
踏ろ門を蛙ハ枝ふろぬん　冨天
巳角形猫ろ〻鶏紙くろう　禾
さよろゝと温泉の静さ沼を窓のろ　羽
栗を亭ろろ水菜の備ゝ一畑　天
ウ
ふ豆ふ保ゝぬ菓ろ〻支離ろ　禾
抜ぴたなゝ負安臣出を　羽

年ふる布と風のもらハの音　天
帝の冠ハ水が細ユーや　乗
いりぬ〳〵く寄ること於くと　羽
雲れ霧まてと入口ハ　天
追従も直てハ此方の雲ハ　乗
砂糖ふ柱へうし　羽
坂より坂をおく掃出ス　天
人のるむ人ハ　乗
ふ内ハふる石が群ケ谷の場　羽
さうんと寄ふる強河路ハ去　天

ニ
佐保姫ハ婦ふくるくうち寄え　乗
不流町人ハ寄ふく酒吞　羽
リーム
箱迴ふるとハ　天
聰を妻ふ角角　乗
寄と稲一茶ふ　羽
寄ハ踊ふ　天
ニフィー
人ていそ義を　乗
笑ふ柳枝　羽
影ひを寄ふ影　天
つきもるがの振る　乗

元オア 祖父うさし呼き半る芳男　羽
ゐうさを遠ゑ経今下ゑ亀　天
ユアラウ 彩新小鼠生ゑ小笹原　全
蔭のんりをとる入お　東
コトセ 彩ゑ毒死力も振し毒具概　全
清生ゑく むさた毒所ゑ　羽
毒理いゑく敵くを花の稗坊を　天
ゑをあゑし小掛毒し情　秋条

辛仙

横たゑて横やゑ人のゑひもの　伊丹　馬純
大笑ひをゑ天地乃芸　小羽
曳迫た山ハさゑ尻肥ゑ　巣久
今の秋しきハ上ゑたゑん　文人
濁ゑゑゑ秋如月ハ西のゑ　桃風
ゑ艶ゑ白ハ花ゑ　秋章
咔ウ象ゑ筋ゑ屋ゑ全の芳　夢苑
園ゑ南ゑ庵ゑゑた　ゑ阜

惚て後を繁昌す月を繁る月
るハ己を忘なり
迫刻いまぐるふ入るを見世物
世界地獄の四もの
寸法橋下面白おもふ白を
繁き資人を割る三ヶ月
蝸牛の茅を接へて隠者
神ハ賜ふ物くさるを中
代を忘る 妹を花乃机
雑るのね寸も弱き隠れ

甚博
警丸
文人
る紙
、
甚博
警丸
菓子
巻阜
桃風

風中ないやくくと川沿ふ
破風へ吹出たる如
三味ハ楽窓花しき出る限
接ぎ新茶を遠入忠常
畜まる負ハ丹裸
沛を忘れ胆を解き紙屋
振ぐけ言ふ鼠の玉ハ
夷(ヨモノエビス)戎(ヱビス)狀の鬚(ハな)ハでとのが
酒の酔気遠の上ふんす
水ハ月出るものをあるる

甚博
雪花
桃風
警丸
菓子
文人
雪花
る紙
文人
巻阜

上

中央ゝ比翼塚の月連理　等九
庫のくゝえる梅妻の健　芭焉
鶯ゝ鳴ゝ菓の門　家の名仙客　弓弦
百畳の初めといへん迷洋　桃風
やゝて義常一を二をもこ巻山　巻阜
巻ゝ多いゝ猶不　聰　堂花
蒔巻ゝ花八照ふ日を花雲　文人
蒔ゝ新ゝ　尉魚の畑　菓之

筑紫ゝ新附留別の吟
浜蒔屋をゝ乙やゝ男梅ゝ　几董
蒔ゝ濱

手強ゝと名ゝ乙ゝ思孫の松　〃
日不ゝ巻屋
芦洲のゝそ形ゝ　よめて
玉藻蒔ゝ浦路ゝ巻を沖浪浪　〃
山中ゝ出
家陽ゝ濱路の絵の垂水　〃

賀之版

フナア

彦根の中平　松井書男　三蝶

ツアイ

月々雨の深めの降る秋　〃

コハア

叶樹の葉の黄ばみなる異さ　〃

古月彦

クケス

川狩もそろそろ　巴田

ユイス

九てく書

コウウ

扇や又稜より出る砂糖屋　くにの良之

声を帆か行きぬ〻や海の上　〃

銀章序執行

カキト

夢覚てく月の要やかく衣　茶風

カウ

彩ハてそ〻孤よ劣しる秋　白羽

ハウ

八朔の馬ハセタ高るなん　魚洞

イウヤ

大き秋庭の樹ハ近く植　風

一方ハ海〻端出る山海よ　羽

のやハ寄り秋扇と尺えり　洞

かゝ笠と紙の傘との仕り　風

後そく居る彩聖　羽

宿の門あねさの石州瘧ゝ影ゝ　洞
万るゆ祖ふ　新　枕　風
葉ゝ揚全京ふふ揚さが扇を春　羽
大工の名まゝ立身をとる　洞
セミ
蟬の声男ゝゝけ乃女人堂　風
ゆゝふの名仕天ゝ腹入セ　羽
月ふめでぶゝと肥後殿橋を掛　洞
物の名も志ゝ書ゝ盃　風
ハ
ゝゝ獨ハ北の世の節の花の髪　羽
寒れ仰を大名乃罰　洞

二
鞘ゝる刀ふ郎を入ゝ合　風
滝壺仕業二変書ゝ　羽
ソロツ
京森八の深黒さハつゝん　洞
傾城行化知ふ所ゝよ　風
大坂ふ目鼻を付ゝ一時斬　羽
ゝんゝ名水ゝ者ゝを魚屋が　洞
セドス
関ゝと陣回士ゝ角力ゝ　風
片ゝ地坊ゝ礎乃月　羽
書ゝ名ゝ田郎奴せる酒の破　洞
冷ハて果ゝ石屋の利ふ　風

飛騨ゑさしの結さ切て被る　羽

家集の古さ如房かくまよ　泡

天性と風の人事を顧庵　風

十万石へくぎろくと生き　羽

鮑蒙る流くし渋の石ぬくれ　泡

柳ゆ鳥ゑ名国なる鳥ん　風

雲の花雲セ杉紙の巻も弗　一炊庵

布れ白きよまちいぬり　枕竜

伊勢参れ記行　公羽

掘の上乃ゑれゑゆ柳の古ゑ石ゑ

飛ゑゑ山ん法くやくへの杵ゑちゑ記さ

鳥ゑ涙ゑ中ゑ山ゑ中の二日ゑ法ゑ山ゑ

あての日ハ中ゑ中の二日ゑ法ゑ山ゑ

ゑ中ゑ一敗ゑ隅川嵯ゑ潜ゑ杉ゑ行

目ハ鬼拉の獄ゑ敗ゑ杉ゑ金ゑ

ゑゑ潜ゑ法ゑ山ゑ白ゑくの物ゑ出ゑ行ゑ

ゑゑ文や柳一を杉ゑ食ゑ俱ゑ杉眠ゑ

行ぬ夜も此世と舟人の綱をくるまゝり
あまよ船をこぎけく
待宵の後の名乃男山
因ちの是人を　誂申す狂鳥　梅雪
とうち出して彼兄に上り懸けなさる
兎て大飆谷ゆさし　うちま旅衣織神くり
大津より高き風ぬまで奇して折ちよ雲
津の我伴ちのおとなる道蓮寺の古墳よ
行く待尋と日岸の誰ちなれたる上あり
らせめくの千向と句をまゐらすに湖水の漣

秋風に梅花路をあり松飄り限りもなき
風景にけおき桂不尽も見とつれなし驚
去はなほに川を湖田州津をとゝるに湖
月も著ぬるよ人には似ずおも黒き程らり
木乃石も間の自に好まるての松
三川去こゝに二つに報を汲の月
自やらも者湖　珊らむの声　梅雪
越石には石菊に梅を汲五丈になしひるらしく
隆ぬ者は尾にこの雪あるは佛寒の枝を
去り桜田川の香りや埼り東んとんせりなれて

水ぶを越て馬ゐ河ぼの渡本深橋をと
渡へ芦むたけ方布川山へを
又もとふきてえん掛を雨のうて
をの蔵うか布川のやう柳雪
古山柳のうるのるハ
さとせやや見ハ松世の旅元
柳芦ふうて生ふ有れるもやおゆう
ゐきハ鉄鉢ようを新橋ゆゆ松の日れ
なうひたや晩鐘の芦山の旅をわううゆゆ
春ふ入う岡れ躍ようを又雨うもて色ぬれと

ゆるさね旅なれハうく紀うう鉄鉢河を渡て
柳本ようを色ゆるよかうふう黄れいうもも
さうう柳間よおさし上うる岳ゆを所をの
松原をふの芦れうよるものの歩のう
色塗ぐく松の林を原の松
久保田を色津の所よ入藤書家の内五府家ハ
民芦度ふ宮ゆ丹ぼ雪陸川をみて
後を松坂をぶ鉄書とうくて行おうこの元
を鉄鉢書鉄ゆ鉄ゆうゆをいゆをゆうれも
いけのうふ稲刈て蔭のう畑ふ

梅田の源うらく之丞小畑の長源陽と
休め源華ようの俱〳〵し和歌を吟とゝのん
きゝ和ゝ世さ奉仕の事ひ〳〵祈ぬく
忘れるとゝ〳〵羽ゝ乳餐ゝ餐あて祈ぬを
孫を奉るゝ世ゝ祈ゝおろ源し

志ゆゝ也し山田の猫やごゝ仕申
ゝゝゝゝゆゝもたゝゝゝ祈ゝ仕ゝ
白雨陽つゝ花も咲ゝゝん　梅雪

大矣ひして文ゝを口ゝ梅雪のねのゝ
ゝゝ志ゝ仕ゝ御陽内山のゝゝ尋ゝて入河ゝ

源ゝ陽ゝ和ゝて之の答ゝ一つまやゝ奉あゝに
外宮ゝ祈ゝ和ゝ歌ゝ巡ゝして内山氏ゝ源を
源ゝゝて考ゝを祈内の朝ゝゝ祈ゝの
第式ゝゝゝゝ郎のゝゝ事内せゝまゝ内事
ようゝ人勝の郎ゝ我先ゝ迎へゝゝ
の脇ゝゝ和ゝ世ゝ乱る勅使ゝゝ祈ゝ
ゝゝゝ焼ゝ矣ゝゝゝ祈ゝ妙ゝて内産ゝゝん
ゝ源ゝゝゝゝゝたゝゝのゝゝゝゝ源を
拝ゝ御陽ゝ祈ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ孫ゝ第ゝ事

神路山をけふ
こそ人ハ目の中なる塵かな
まこと帰京ありて一束　梅雪
借物ゆくやなの事ハ巫かりゆゆしの国ふ
指をゆ入ふ一ふ孫ふ者ふ帰ふ所なふ
人の庫ふ世間の俗土乙田先所のかゆ義具
して鳥ふまこと所ふも好事ふまやと寄れ
で古世ふ武のなふ所なふ人ふ不武ハ行ふ
なふ又第の先ふしきと生ふ拾ふ生ハ
花の名神ふ鳥ふ見ふ天ふ

とゆ知れハ口きと作ふこたまふ
ふこふふ所ふ生ふの義せふふの花　冬支
あまハ家ふも生ふてんや明人と招きて連歌せん
とふるをいふこめる神ふくこてのふこなし
次の日ハ内裏ふ都帝ふ三殿相のふこ静ふ
まこ徒ふ近ふこてこてまふ行ふ旅ふ
さ北ふ義ふと上濃ふふ国ふの知ふ稀代
の強ふふふ切ふ西所の強ひ松くさはふの
学ふ事ふ学ふくなふ人ふ拾ふ世ふ知ふ
ふ事ふ神山ふふ川の流化の西ふ速ふふと

あやしき家の見かこれ山藤百丈の高巖松
そゝれえ苔むすあるよすがの源と尤も誠たよとし
行程五里の間小四十八瀑を落とあれ世間無
限丹青手一段傷心画不成絶景魂もしびれ
雷人とゝろよ句あり　さらみも只惜られハ
岩を削りとゝハむきみや村ゑ家

あゝ限や馬よ潜る尾花原　松雪
あの坂とゝの滝と紙ハ林丈大よ連ゝ川隠く

かつきさはり給ふこと
先まなこ八昔時樣大彦の内侍なりしを
ゆ杉山ふるき移葬原の和ゆ遷く拝尊
あわら臨幸の所時先拝して後ちまるの地を
ゆ〻ん移来く伊勢皇太神宮宮と称ゆ
墓よまし〻りの高行上人くいてかし〻し
八十年程をしりて別家ゆ先祖なる乙女祢
系図おし〻けるまゝ祢宜を唱へ給しめ
のゆ〻さ食かくもあるかく〻いの世まれとも凡人
城名羽祢代のるもとく拾捜

穂おくしの名をあ〻〻〻
西家の乳や口の拾えるる家の祢　拾雪
月こゝや姉志ゝとゝ〻ゆ〻ゆ〻又家ゆ〻〻〻〻人つま
いの地ゆゆ乃ん命のゝちゆゆとゝ〻ひ〻よんう
祢をし祢祢ゆ〻〻き者ゆ家ゆ〻ゆ〻と祢家の
ゆもんゆ清ゆ祢東方家ゆ〻ゆ〻ふち家
稜ゆと受て朝鮮ゆ墓ん〻祢樂一捜求ゆ出
ゆ〻ゆ〻家ん〻ゆを弱と中ゆも利益ゆ是弱縛
拾意は家理ゆ〻ゆ〻の乃ゆ〻ゆ〻四家ゆ〻ん〻と
雪羽ゆ月祢ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ん〻と

是れ花百生路くと雨て捨所見ハきえも入
さしたん地とかたるとゝ行くら見の立さ小ハ又おゝ
奇ゝ山る山ゆ里ゝ里よりて見て元の往来悠然
の人年ゆゝ多花たよりゝ落葉ゝゝ年ゝ気を
見るとこゝ奇ゝ坂ハ万尋の絶をゝゝ万万の
ゝらよもるゝ山ゝ里と吹て山伏ゝ峠よ動る
紀の海伊勢の海を山あゝゝの陰海船おゝ嘉浦
くゝ小島の名ゝゝ所おゝ見ゝ見ゝ見えゝ
須磨の月の中と夢を刻眼ゝ
からして奇ゝ所ゝ見ゝ仏閣を拝ゝ峠乃

第四ゝ宿る夜の中ゝ雨かよゝ小て風強
しゝ十郎吹ハ放ゝゝ山地ゝ拝ゝ峠ゝ
裏道ゝらゝ見ゝを分ゝ山て乃ゝ霧ゝ居ゝて夜と
ゝ乃ゝ吹ゝ前ゝゝハ樣の海己ゝ限を隔ゝ見
弧館宿時風帯雨遠帆帰夷水連雲乃
くゝ二見の浦を右ゝ人奇て行ゝ宿ゝ
見反拝て迎の人来ゝ打連ゝ山田の里ゝ
帰宿あゝ結ゝ伊気を拝ゝ尾下
拝ゝ拝ゝ拝ゝ行ゝ行ゝ乃ゝ行ゝ
来くゝ山ゝ躍ゝて立出

送るものも見送るものも秋の末　冠支

花かとまがふ梅に酒わくほとゝぎす　梅雪

服のくゝ住酒わくほとゝぎす　梅雪

月てらすくれなゐ紅し松坂の眺て津

の海よりの東海つゝ海つゝ白の紀きるか

詩つ安達ともるの雲像なれい大名家

よりの行至のるゆゑて月出雲橋いくんる

新一不新橋の河をねも書ふあ人地して

世界小曲一般の力多

今日ゝ二八月別よ中一物　梅雪

那所ゝ通ゝ兎山の麓下ゝ出又善源ゝ

関ゝ入る梅雪ゝは

あつきを上ゝ月ゝ出ゝ一おかゝの井

すゝ月まる中ゝ世界のゝんゝ入るあて

りゝ的ゝ月ゝ出ゝ花の美ゝいゝ月ゝ

今ゝ月ゝ又梅ゝ

一夜嵐ゝ風を花ゝ中ゝ雪の舟　梅雪

二月ゝ乃新の弱ゝ的幸ゝ天気晴れい

矢橋ゝ波ゝ月ゝ出ゝ

月ゝ出ゝ源ゝ深雪日枝上　梅雪

月ゝの月ゝ出の月ゝ出ゝ花上ゝ高ゝ

申の刻ばかりに京に入三條大橋の東に
宿る此日は十二日吾妻より杉田やけに御使
のぼり給ふ羽州の庄内大守にておはしける
行列の厳重さ上中下まじ清らかなる御さまにて
目もあやなるさまなり又この日ハ宮家御通りにてさん
みくに京ちうも連加りて暇の先に花咲を騒ぐ
柳の夕より家る社頭坊をめぐりて先に十六斗殊勝し
ゆききしなりて松尾を出清輪寺の乃義詮
前に詣づれば忠えぬ君の清りさへ子細ハこに
松限る大渡月橋をわたりて嵐山に

なよ竹の雁天龍寺を出て川に近る人の嵐山
花は昔よりまも中かしこ清代さんの帯松く
御殿の地なれども今ハ細道さへしく
おかん稲ひつるかも萩の家
寄せゆかり柳の門に秋の暮　梅雪
三國傳来の清涼寺仏ハ折ふし大きな開帳にて
志もくねし筆を宗の高根ハ先見目におひえ
登りねきなに足痛あく代りの人中ひてよう
清範つきをこしくハ町の東を出て入大覚寺の
御所の前に大澤の池河に松梢見とあり

おひたの原も作る程なく中の島山をかすめて
出きわたるのあくさ面白ふもきこゆ

生駒ぬ嶺うすんぬのう

もち刀はるるふうへ雅い居沢の池の西のわたりて
梅う畑の姿ふも白ひ咲く言ふ雅ふ点く梅い
いりさ降ゆうく鼻を考ふ似うく一流の屋ふ
さ〜入ゆ又おろ雅い渓河ゆ多く光うう流れ
昔の下ふ茶屋ゆ酒をしかうきゆ

こいはくふ茶ふ見うに砂見うに　梅雪

いはくふ森ふ森ふ沈田姫

苔の細石を作りて梅尾梅尾の順路を紫
門流水依然〜ゆまおとしに閑遊の浮ちし
一張村ハ雅を言うの如ふ点く味とるふの如
連風ゆ雅ゆ西施をはさなむきをゆ女ゆを
けさ〜ふ言ふハ河うて張きるゆいひのえく
彩〜ゆ旅なる雅ハ言うう

あうまゆ雅う清や紫乃霧

言ふのゆ中し明鹿の星数〜言ふと告知
入〜北野〜原宣原ゆ額きこふふ行うしく
旅河ゆ帰ふ又明の白ハ金津水將美の

部入人拳足よ所橋の下とうる出る今い
くや古ひとの頻りこひしくなりてを枝み
ふ枝り北ちりの東もよ我中の扇を敲く皆
あるとく梅もれ当ひ[illegible]よ新しき
五涙のあり也入集す枝の夫るさし敬ろう
落たれおそきてなり枝の雨
雖後の濁りをふく世尸の栖を志めしを
閑寂のををふ世ふ世ろ也

雨吟

ふふ五ふ水のんやとろてん　同奥
黒さを片て拾ふかけ　ふ羽
彩ひは為奥どもがさ(ハイ)て
一日ふ隠二日目ふ好　奥
ふ所を半面ふ尺拾拾絆　、
ふ稀ふしくも刹ふいぶふ　羽
ウ
嘉深き四の川ッ射鵜ふ脂　、
おおふしふも惜れてんセ　奥

おしてい[illegible]るまゝくの抽おりし　英
[illegible]の[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　、
関の東　伊勢[illegible]　[illegible]　[illegible]　羽
流き[illegible]ふ[illegible]　[illegible]　[illegible]　、
[illegible]も[illegible]く関[illegible]い接樓乃　英
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　、
[illegible]人扨神ふ[illegible]　[illegible]　[illegible]　、
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　羽
[illegible]乃絶ふ[illegible]　[illegible]　[illegible]　、
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　英

旅の栖も[illegible]屋と呼ばして
業平　[illegible]る　[illegible]　羽
[illegible]いと[illegible]ふ[illegible]　[illegible]　、
け　長持[illegible]　[illegible]　[illegible]　、
[illegible]は腹の[illegible]　[illegible]　英
易[illegible]は何と[illegible]龍の[illegible]　、
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　羽
二ワふ　切[illegible]は[illegible]　[illegible]　、
[illegible]清のこ[illegible]　[illegible]　[illegible]　英
[illegible]ある[illegible]雲[illegible]二日月　、

小橋でも裏ろ[illegible]孤ハ注しき　羽

蒲よくしゐ分雅子乃風　〃

又宮居き古命鬼間けハ下り蛭　奚

刀田小宮持為程ハハッ時　〃

嵯峨切りあ作く京、海ろ乃　羽

彩ろ[illegible]彩ハ今稱乃内　〃

孤去の姿も為花ま感迄き　奚

為の月ま之もそ水くの女　ち三

欽仙

日を出ろ[illegible]わりハ庵の居家外　月玉

神雪ゝるくゝを城浪家　公羽

八九年一変さろ[illegible]塀の待家て　亀文

宮ろろ宮ゝを迄乃宮　菓風

鬼ろ[illegible]提ろ[illegible]形と月の書　公羽

清く半の[illegible]ゝ仲の表乃き　扶筆

雪居ま廉の変ろ[illegible]浪節　菓風

風叩ろ扶ろ姓[illegible]迄ち　月玉

不化坊ゝ坊ゝ指さゝ孫氣や　因玉
山ゝ梅ゝ是ゝ雲ゝ出ゝ　龜文
下り物ゝ踏ゝ不ゝ彩雲の峰　仝
ゝゝ風吹ゝ音ハ賑ゝ　菜風
気遠の彩ゝ雲ゝ綿を乗　仝
ゝゝ〳〵除絹れ月ハ星ゝ　因玉
老田わも納豆汁を風呂揚り　仝
ゝゝ成りしも降の天姓　龜文
斗吼ゝ湖の松の枝　園境　仝
ゝゝれ月ハ角ゝ海浪之　菜風

一けゝさよ嫁ゝ娘ゝ桃ゝ　仝
んて祢を祈ゝ州　因玉
麻ゝ文の五ゝを云付ゝ　仝
命勝ゝさハ今ゝゝ　仝
大ゝの為てゝゝ書ゝ湖ゝ　龜文
ゝの為ゝ上ゝ入相　仝
姫風や常の風吹ゝ海苔　仝
菜ゝのゝゝ麻を百　菜風
小男れ大豆ゝ月乃雲　仝
ゝゝ西ゝ山ゝ昔あ為ゝ　仝

ぬきあてゝおいけに新れぬ中と形り　且玉
雪を妙く〳〵踏分て行　仝
盜人ハ出藪の鶯を聞あり　仝
名あるも世嘯くるを恥ぬ　龍文
同し紅葉中ゆ出る人の花　仝
裏れくるの遠〳〵　元山　仝
皆辭を新よハ儒者の茶人　菊隆
茶碗の中に新れる表れ風流　仝

九月書畫

形物のふり〳〵ちらちら紫外　乙雙
氷
入〳〵の思ひ清〳〵初氷
手紙や蘭陳ハ梅の香　、且玉
九〳〵の日南陽孫と共
七夕菓菓ハ蓼食乃賜ま　千霸
南人も祇よ信を捨初時雨　芳机
冬至
就ま日のと出ひ冬柳　歸形

源吉寄中ゝ貴殿夢中　帰船

一ゝ聚寄ゝ時沾州
秋吟一日又々白の因幡流るの
発句を結無よりてのゝうらを
おもしろ出ゝ

播流馬中庵ハ玄の俳ゝ宋　蒲城

後清水乙

三ッ四宋乃　一炊庵

中九三日月ゝ降ゝ

歌　紀

蒼や々の代扉のねゝ花高雅　銀石
文ゝ子ゝ寄俳梅日　ゝ子
ゝ人能俳の自ぬゝ下ゝ子て　庵玄
ゝ異扉ゝ腸ゝ毛ものゝ花　国補
月ゝ結秋月のゝ子ゝ形ゝ　ゝ子
中寄ゝ云ゝて掃ゝ出ゝ苔　銀石
山ゝの耳ゝ也ゝ日ゝ砌ゝ掃　国補

清書も拵東宮も御
新さて半日若狭一人位
ぞこの嫁入れ家と紛ぬけ
細屑い花抽の句ひとう男よ
源九郎義経の風格
又六町佐川連てお屋敷
高麗いかに確芸術やく
俳ハ月水通りの高麗
冠の縁を半ば出
人のとも俳しく後悔ねえん

序表
銀石
水相
序表
玉埔
序表
国埔
序表
水相

ぶれてる高麗水高麗の稽古
古寺の二王の影も春雨風
陣家とえんしゃ車油屋
惚て居る回士水服合廉場を
地獄のるすも又水半源
俳場も高麗も船さえ出し
乗人形も俳義り俳
烏帽子高麗の低く尺之
焼家と陣と能弁水清
陸奥水俳義の後河豚を捨

玉埔
銀石
水相
序表
銀石
玉埔
序表
水相
国埔
銀石

信濃より武蔵へ
遠き国をかけ行のて
若七二交替国ハ流
川遠浪い絶て一寸も波ハ
立を奔まる人ハ如意ハて
ちやくちやくの嶽しき源山陰
を敷て船を社家の旅を
陸てらの師も花井るも花
去るい後き陸と称ハ百

公相
摂津
行石
国浦
摂津
公相
行石
国浦
摂津

歌仙

翻紅
白相
如染
如雪
在負
沾凌
去車
浪甲

雲ハ雲きぬ京ハ宇佐藤兵の社家
松葉ハ来ハなきハ 年
仮橋ハ年をおろもろくを居て
影の代りハ西葉てはくを如
浪深の貴よなりるを十九初夜
柳の枝有川のを家
菓蘭を種をひこ新嶋の雪
野を命帽を野の下雲をの六

紅葉の色もいろ〳〵でき出た枕
作りハ言ふ迄なく劉の書
面白くしと詮索しる庭つゝ
秀めるふ強い人てなさん人
星の使者接拶きぬ〳〵純色し
芳野〳〵焔を燈し光らく
限りてハ星深夜々の北月
ところの物ゝ山渓ゝ
十八丁家よ高所のむむしろ
瀑ちん外一番の書中

嘯月
數紅
雪雄
如塚
如雪
在負
沾陵
去甫
狼甲
嘯月

三

三ヒ小入るもちろん毒老の強衆
獻りしを清僧乃愁
狐俗と狐狐ちろ白ろ孤
叶ろ狼ろ灯を入れろ
付ケし裏の法師と如て尾花義
ト沿ろ原も物ちろ
乃嗜く寝よ一段の肉
ち号もちろ踏迄て冷ム
雲風よ一日訓深ゝ物
嘯りし月清ろ行きて

數紅
沾陵
如塚
如雪
在負
雪雄
去甫
狼甲
嘯月
數紅

世ハ俗ニ藤よあらんや夏の人　沾凌
塩蒙よ海士も斗の雪を分　如堵
蟬ハ泥中出ル清ル　如雪
高ハ高めれくかそる順　在負
清ハ人ハ高のなすくめの清ル山　吉雄
ゝを悟ル離ル春の花　去甫
清ル世を憂ハ黄ハ菓　很甲
長閑よ時宜の浮き人ゝ　晴日

本時庵茶亭ゆく

愉ゝ坊考い御ハ寺ゆく　白羽
板屋ハ塀よ　所ひや塀の梅　〃
ゑしさとあつひ中の花菜ハ　〃
一夜ゆく冨士ゆきゝ屋根の雪　〃
山寺ハ所人世ハ枝ハや毒の花　〃
山源ゝ人と弁ゆる　〃

七夕

ゝゝるやねと織ハ織のおゝ

子まち庵神主

解行や池水ぬるひれ蛙数　〃

鶏頭の花通るうち初冷　〃

安房里庵

一声ホ海堤矢きうり杜宇　〃

八旬の翁

松ヶ枝や八幡高うはつ雁　〃

毋順翁

三ツセッ春を古竜や柳の絮　〃

剃刀の高ふうら屋や黄葉時　〃

梅咲や女の寄ル馬繋　〃

巴雀舗涼

姫の頃弓張ゆ　き河東ゆ　〃

特鶴く飛の夢とる時西ゆ

十三夜任吉迫を

神松の月いい寝の價の松　〃

十三ヶ夜

伊勢ヶ浦

結ばるるまま古り経ぬ花の絮　〃

雑ヶ屋の寄こ知ぬ新のつま　〃

芸石山瀑布

夜の嵐れ屋よ都の高かくれ
言腫の雪の雪や蕎麦のと

夜言

酌やるふとち月遠ふかい
まを抱ぬ姉の門出やふのう
ふ馬の鈴ふ船坂よ鶯
梅の香と中てつ浜や渡の風

入湯

中一塩や 蘭と中い百ふ言

言梅ふ人トせい
手拭のよまてい高ふ二ッ湯ト
乃ふ
鶯ふれい襟峰一松の風
一位よさ八ふ白時を用ふ
須ふの素ふこを坊ふ谷の梅
素の字を泊ふ

ふ梅ふ表用
月の乃乃乃花ふ魁湯女の指

敬庵

ゆきこの二月服をくまてる隠と云　、

去年る御ゆるの句の如く

今年の枝かゝへ〳〵花ゆ茶　、

後言

神の名を係ゝ祈るゆゝ　、

四季

ゆゝ茅蜩ゝ小い茅日も暮ゆよ　呉川

ゆゝ〳〵ゆゝの俺ゆ花柱ゆ　、

さゝ雪や笹も形〳〵てゆ代の柏　、

待ゆの墨ハ人ゆ神ゆ雪ゆ　、

歌僊

昔あゆ山鳥ゆ〳〵松の花　茶風

待の尾上鳥ゆ〳〵ゆ　ゆ

かえて〳〵隙の紅ハ時雨て　、

待ゆを孫雨ハう後ゆ　風

待の月やゆゆう深人も歌〳〵　、

ゆゆ苔沉を柳〳〵　柳

帰〳〵鶴ゆ隠し〳〵頭ゆる　、

廊を接して通路を設
凡
ける形を除て前を廊を
、
乗る類却て特車の繩
扨
者てうの乗御ゆ乗るもの
、
程をうく春秋を後
凡
水毎の河の畠の茶店設く茶り
、
畠をぐれるものと思の親の
扨
茶をぐ茶きく設琴を
、
花の陰ハ隠ゆり蕎麦
凡
咲る花を敷不繁る
、

踏蕨うさ拵て伝りの書籍
扨
咲ぬうちの梅れを節れを合
、
乗ぬ不懲り庭へ出る翳女
凡
待の蝙ひ多くて弱く人之
、
沙弥を弥生る濃色扮りの新
扨
歩行いれ人旬の古物
、
七日の法事八日わ乗制
凡
嫁乗を宮るよ参ら先牛町
、
長さ学て不義の形を賜
扨
出ぬうち物のお留ハ月の入
、

古く侍る菜蔬ゆゑ　凡
ゆゑ〻ゆゑ国考へ　〻
侍ゆゑ　通ひ来る　羽
ウ
侍ゆゑの看板なれや大御所　〻
旅籠屋ゆゑ　揚屋ゆゑ　凡
新宅の陣〻斗　暑祓ゆゑ　〻
寄をゆくゆくみちやいやゆゑん　〻
乗物も上きい牡蠣殿の三津　羽
寄るのゆゑ　ゆゑ　飛業

吉吟

船造ゆゑ吟ゆゑの邑蓮　廉文
鄙のちいさな家内の蓮　白羽
実〻蓮ハかゆゑ孤なる掬ひ　〻
風し止〻ハ口俗ゆゑん　文
我内て待放さぬ月乃人　〻
或ハ地〻　織姫ゆゑ　羽
ウ
灯ゆゑ田て居るゆゑかさゆゑ　〻
花ゆゑ能をの笑ちを庵　文

ほとゝぎす浦家の俤くる程嬰兒
孫山の旅ふ笠も影させ　羽
尺蛇忘ハ男のこゝろやまこゝろん
髮ふ筆をとて授む舟川　文
鶯花ゝ孫のこゝろ花みゝ九祿
回廊も出家陽ゝ行程　羽
丁石筆生れゝ家て死ゝ
稿ゝ青紙ゝ鶯ゝ月入　文
半蔵の涙をしぬく茶の花
こゝろねゝ陳の家こゝ　羽

一傾城の別髮を尺ふ海苔
大名ふさゝら稱ふ茶屋
陽炎廣ハ家の八洛北ふ
後絵の役ふ達磨忘
三軒ゝ茶ゝ茶ゝ
家ハ通ゝ稱ゝ後ふ苦ゝむ
ふ茶の乳母ふ茶付ふ林ハ退
孫細ハ取ゝ度舍の月
茶屋井雲出ふ足のゝ川ふ
庵地ふ驛ゝ仲量原松

文　羽　文　羽　文

新ちく海へ出る波の彩　文
毎年をおろかは新葉ちえん　羽
杜宇(ウ)更衣初揚枝さしきり　〃
河原柱ちる坊を揚ふる　文
壁の苔ふむよるもしのび蘭麝　〃
ちらちらふる人今帰ちるて　羽
家書ちく花冬て春る傍の入　〃
庵の柳一ハ子稚も大木　風兼

歌仙

陰源を橋を眺ほら移りせ　千濱
水桂の庵ふ半ち象施　各務
名人の義ハ猶ち変巣ちて　一窓
ちよいと一両毛新ハ活ち　濱
洗ちロふちぢんよ破ふ船のち　務
庵を弁ちるハ神ふ仏を　窓

ウ　ゆくとしをとゝうの春　渓
　　唱への遠てゝ家引学文　水
二ゝ新河駅ゆくはし素信哉　〃
　　後を信ようゆくゝ株の友　宗
首丹て新ゝ捨ゝ奥屋を　〃
　　和家の清ゝ家ゝ花杜杜　渓
咋春も雨ゝ猶清る聖跡の東　〃
　　六十六部ゝ行ゝ新　水
ゝ利ゝ人も出ゝ花ゝ蔵　〃
　　柳の新きゝ清る月新　宗

椿の巣ゝ傳ふゝゝゝ戸を敲ゝ　渓
　　笹のゝゝひもゝ清ゝ媚　〃
ゝ高しゝゝ雪の高ゝ古寺新嵐　〃
　　打碎く時上洞立しゝゝ　水
徐寒野ゝ腹雨ゝ雲ゝ下り　〃
　　辰ゝ清る高の招ゝ　宗
連物北青を高森乃杜宇　〃
　　四人可ゝ古ゝ高ゝゝ新綱　渓
尺送ゝゝ毎ゝゝ一附雨　〃
九十九ゝ小柴ゝ清る著　水

言語葉くさ生ざんすうとゝあを愛
す桐葉ゝへく紅ゝの石月　扇宗
紙幅ゝて山路をたゝる雨葉哉　、
蕎麦道形ゝ岩を出る櫻　渓
遠くゝ放しゝ修ゝ出所　、
打法屋麦細き い蕎　扇
又き掛ゝ来ゝ掛ゝけ荘ゝ　、
田舎ゝ下ゝ鶏木乃屑　宗
花雪をゝて参ゝ寺の門　、
ゝゝへゝ路ゝ苔乃上雪　蕪兼

船中
笠一重月の吉屋の蔦葛　吉邑
紙屋川ゝ舟ゝ
船ゝゝなゝゝ秋色めかゝや川　、
ゝ作中ゝ雨ゝ影ゝ月ゝ雲ゝ　、
九月十六日内侍の筆屋を訪ふ出く
入月ゝ出ゝ月ゝ雲ゝ神ゝ　、
船情ゝ旅ゝ忘ゝ乱ゝ梅ゝ　、
外宮御参詣ゝ
桐葉ゝ雨ゝ海ゝ　、

白魚や清き流れの藻刈舟　馬通

舟と姉妹ありく追手や杜宇　〃

うつ川にゆく雨の踊りを　藪桂　〃

八十賀

一点を貴ん八千代は神のみどり　清花

おさえり

鬚籠の通実佐保姫の神まつり　〃

鶴尾

みよしのや摑んで口しの桜持　〃

人の来ぬ所そ振かし雪の上　白羽

春雨　隣家に少女の三味線を聞て

糸中にや隠れ行かなりしの山　おむら

久安寺にて三十三回の法事を営み

人は行き年流れも夜は行く　金羽

満願寺の風景

椥畑や杉を枕に深く寝し　〃

石宝園

岩むろや神の誉へれ子菊縁　〃

住吉幸綱

新春に庭を出るにや神と実　〃

古和古門ふ毎を浮く

世北姫の二葉ふと描や塚の裏　白羽

伊丹馬孤の歳ふく
京家麿郎眺を

清流くハい南ふと泡ゝ花れ妻　〃

見盞銘

伊の葉北唐源ゝかくや服　〃

又

新源ゝ分ハ恨ひと把祢の　〃

題八軒家

新ふゝ八乙女の川被石合　〃

河内八ケ所遊宴

ちるや葉ふる塊ふ京のみふれ脛　白梅

日祢田色回庖ふ恨ひふの伊ふ多

味噌童といふハ老ふ身菩畑　〃

赤塚の元居遊宴

芽も枯く椿の林ふ白い井　〃

信舟ふ姫ふ川ふ春の月　〃

伊芳の二中信して

財西吹古の鼓やあふむ石　〃

末ふ嗚ハ人ハ乱芳しふふきに　〃

京真室文墨同きふ戸医る

月雪の舞ふ〻庵し白し梅　白羽

贈禮

拾て実を結ぶ告よ梅のも　〃

渡舟

笠れ裏陰ふ〻ふ雲の雪下の南　〃

字治の舟橋

きふ〻雪の雲や戈の〻人君ち　〃

蕭言

暑ふ〻ふ　稼　侵ち　鼓男　〃

市川海老蔵を見くふふ　白羽

関れ集雲を竜山の雨ふの甘しして出胆

雪ふ相逢ふ孫ふ信をめふ適ふ信雲ふ動る

胆見をみて動る人を〻ふ雲ふ人ん

殿平駒の部屋ふ本如ふ志りへて今や去る

時の青毎　一ふ孫の陰ふふ孫せ〻し

又来ち勢信布の中山をふ〻

上巳

興雲業雛や半ふ〻し〻ふ代苑の孫　〃

肥前國柳松とおくるさま　白羽

村橋西路雪初晴　雲暖砂乾馬足輕

柳松翁宗搖子宴のもてるのひろ〳〵ものぬるのあるをそなて出ふる事ありて夏遊きりのもち半面ふ今や任果て波濤の西方故墨れ忘孫多人〳〵長途の労も祓へハ

迎——吟きまいハ芳——

氣禁發腹梅の香ゆ旅の旅外

十六夜やタ雲時〳〵望　〃

興意俳諧　阿陽徳隆連中

落花ふ来ふ後も〳〵ふ多の衣　仙芝

亦和一の花ふゆうやうう　富葉

閑白も日和晴ふ陽女連ふ　嵐亀

人長歳ふ二一天紙　芝

看板ふ嘘ふ元ふ松ふ都の月　葉

燈ふも風ふ琴の音貴　亀

鄙ウ翁ふ有ふぬけて出ふる元　芝

多ふ気ふ天ふ春ハ秋ふ如内　葉

年のゑ小興業の札ゑ生年町　　也
接第へい　第表　姿流　　芝
塩を踏身よまぐ拍一牛王札　　菜
名墨の肩いた色和一　枝　　也
ゑとてゑ彩ひの糸れり生合　　芝
いやふんを踏表廉の寄　　菜
琴小業小花ゑ体相のゑ　　也
人り延をゑ表西川　　芝
花舞とい へゑ志げる瓦天宮　　菜
蔵ゑ寄ゑるいや目の浮生　　也

糸経小現き入めふ物思ふ　　芝
ゑ物を志きゑ彩志ま文ゑ　　菜
肩可媚生寄る煙寄ん苦い時　　也
弱来かゑよん中乃ゑ紀　　芝
ゑ姫ふうう彩ゑ彩し桃吉坂　　菜
祈ゑ偏きゑ労嘆ゑ竹る　　也
煙の彩ふふ紀可浅ふ髪　　芝
偏(ヒカケ)捻も極ゑふ志紀表の寄ゑ　　菜
ゑ翼ゑ表彩ゑけゑ文彼　　也
浸れ表可目の入ゑ也　　仝

あしひきの山のうぐいす嵐　芝

ゐるまゝのいろは神武之末　葉

肥い雪の出れば行くて立めぐる孝　仝

影ゆかぬ鶴の巣　芝

毒蛇の人嚙たゝ行くあの毒蛇　仝

千句の一ツ女おとゝ鶴　亀

花の孤舟瓶梅ゑよい仮　仝

蛸自慢よ果ゝ雲も聖ゝ　葉

四季の発句

阿弓西吟

行秋ゝよや落ふる小る南蛮　丁〻

蛸ゝ一ゝ家を石竹おの山　閑江

蛸の梅の今ゝ桂ゝ　桂雪

さゝと傘れ市も梅れ白ゝの花　直月

入相の鐘を春雪ゝ牧笛小　仙芝

名月や海ゝ浦ゝ石ゝ　嵐亀

然ゝ月ゝ名古屋賀

蛸筒や雨の雪の鶏冠白ゝ　白羽

題水囊

かゝ[illegible]を[illegible]しの[illegible]姫[illegible]　公祖

雪の橋半[illegible]ていとゝ[illegible]

　　雪　　〃

三月十日[illegible]篠[illegible]天[illegible]の中　〃

　　詩祇入洞

月[illegible]の[illegible]　　京州池田　秀坡

[illegible]　花[illegible]　秋乃風　仝

除しさい月の[illegible]　仝

半歌仙

和年や[illegible]の[illegible]　蕣塚

ふる除[illegible]　白羽

吹ハ[illegible]の[illegible]　一来

巖の[illegible]　塚

[illegible]月[illegible]　来

[illegible]　〃

風[illegible]毎や[illegible]の人[illegible]　塚

[illegible]の[illegible]ハ祇[illegible]　〃

[illegible]ひの情よりほどくに愛情を　未
[illegible]の[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　、
[illegible]の[illegible]ゝ[illegible]の[illegible]き馬　塚
[illegible]の肌ホ古帰[illegible]ん風　、
[illegible]ウ[illegible][illegible]れ[illegible]と[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]記し　未
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　、
[illegible]白髪[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]世を[illegible]れ　塚
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　、
[illegible]の[illegible]目をやし[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]と[illegible]　未
[illegible]ら[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　、

歌仙

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　蘇角
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　公和
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　永堂
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　角
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　堂
[illegible]ウ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　角
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　、
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　堂

清さかさい皮やうの入袋　笠
なやうなものと見事な工夫　角
かとまきに成い様白ぬの　〃
素袍と云しるし烏帽子　笠
係絲とあるを腐る編を　〃
使ふ眼まいは池ほとりなる　〃
ゆしい所や宇の色いは雪ふる　角
長殿の新一本鑓長の柄　〃
河の岸なる花よりの板金屠　笠
今小蔵北之辺西後　〃

ニシテツレヲ形り性急ハ歩ぬる　角
皆使ふ毎ふ死ぬやう　〃
あらをいの時ハ御北ちと　笠
ふまるまの矢数日　〃
見世のうちタ方ハ主人若ふ　角
律義ハ叶ふ仲ふ　〃
里ハ人や家ふ行山ふ　笠
月香奴等ふ居ふ歌書　〃
赤ふもの紫ハ先ふ為たて　角
長ふも同さる事国の文　〃

笑吟小舟漕待ある仕丁也　笠
こゝ身もまゝならぬ宿の陽より　、
ウ
色晴れ別くの豆し記念衣　角
八坂の塔とおめ出度なり　笠
不留目に見る我にどきる須を持　、
沼のをとも川く上すまの　角
虫数く又ふをゆる橋川　、
引別来屋根ふくまち　瓶業

歌僊

蕎麦の宴に弁川まよの月　呂雄
川むかひより白き木芽　白羽
霧ひし山八賑饒に土寄て　蘇角
何をさ聞つる気記て芥つる　庫山
冬雨の暦上く切板屋青　如桃
櫻くメ子能楠きる花　瓶業
ウ
屠気楼目菜入と来まゝり　山
家まるとく旅掛家押栖　雄

田舎者をあざけり
竹の陰にて月乃白雪
汀なる漕し休しなる西瓜舟
出さるゝ迎の義入
源氏又勢多を渡せる
六十余騎　後藤　摂津
何龍ハ高らて花の日と清し
清書参詣者の多
皆歌くらべ　佛も元禄
多石　積らし　北麦

羽
桃
雄
角
羽
桃
山
雄
角
羽

あるが対い神　亀の叶よ　ちゝ
第像の華院　ハ雲卵
愛るをおし　切ら　石車
清負の　ら馬蘭
大仏の像を刻　造
月の及りし　ゞ鬼の
寄業ぬ　ら　乳母
唐の業花ハ　中　壺
物ゑて　ハ　杜
浮世をぬ　又　神関札

山
雄
桃
角
雄
山
角
雄
桃
山

旅のうさ忘るゝ程は
雪を踏みくんもの寒き
お庭水の底に
何万貫因幡さぬき
寺号買来て
足痛けみくに花を
老の陳佳保姫
蝶舞ふ小数さん

鳴き菜乃ハ皆も宮めぬ安
見れ佛もあれしなる慶
まつ神の御うたを上ら絡
序奈ゝの麩みきさゝ文
商人参書加つまるゝ我住
宇川ゝ宮ゝえ多い書葉
叩ゝ水ゝ風ゝ水ゝ毎の下ゝ者
竹割所ゝ年船住ゝ
皆の葉れ梔さへ蕾を結動を
栞（しおり）ゝ水ゝ人向ゝ墨

吾時ゝ唐ゝ高反ゝ相ハ武士
不流ハ住ゝ寿ゝ水ゝ
九ゝ見れ神ハ宮ゝ松ゝ嵩ゝ
むゝも参ゝ鄙ゝ
相原ゝ皆田ゝ後ゝ
ゝぐゝ水ゝ宮ゝ
大名ゝ高葉ゝ呼ゝ八一ゝ
面目ゝ形ゝ文葉宮所
白樺乃形ゝ意張の宿と米
沙柱ゝ月あ孤ゝ人舞

絵と詩かハ都てもかなし

陸奥ハ生まれ地幸の意

近江の山も原まとく微雨ふ入

姫大刷書き歌く屋の鶏

検校さん長仕を治部支師

天明の繁を雅なく書

ふ茶屋ふ絵冊も変り花の夜

田螺も一歩ふ絵ふた天

秋景

雪田ふく

二足めれ蛙飛ぶ事蕗の花　直竜汝　茶子

一茶ふ明二つ打ちとき

ち信ふ画も何をくなる三五の夜

明ひとき絵ふのひ打ふ花ふ

蕗生徒繁のふは　白羽

稽古ふれい上ふ原ふ絵と先ふ神風の

及ふ原ふ歩国や茶の墨ふ打ふ者

[illegible]し連俳を捧ずの雲布性昇随
年てハ杉かやけれかしなる月俗を冠し
動ふるうゝ乃もて像を度民とこと
みゝ仮ま歌年の法橋法眼の市を
さゝ書て孫高宋の更ゝ城やきゝ
しゝ心ゝ北ゝ形生やゝ人みあつるみあや
まゝ月おまり一の年ゝの月のゝ
城兼ゝ一乃の席ゝを流るの豊かな
ゝゝゝゝんや又わるゝうゝゝんや
雪山のゝれ待やかゝ衣

仲冬奉興行

四ゝ今中一ゝ深る富士の山　五雲
影ハ闌ゝ新城青月　白羽
ゝ乃のゝうゝハゝれ紙細工　〃
雑木ゝ名を寺し籠屋　雪
ゝ海れ濁ハゝるゝゝかゝ濁し　〃
尾を新暁を布る村白　林

嘯うとなる下界の風を次
第四よりてをれ更ひ跡
名残よりのちくうう宵信人者
雪一年をあつてあるね
ゐよりも冬わき岩なれや
青葉の影まるかよ花ふし
今ゆく妻ハ半ばこ春おろね
早稲もかくまう花おれ神
山の端れ繰よる遠ゝ後の月
秋乃裕ハ日まく長ね

立春さしあけとの雨をる際きる
阪始ゝ新父書をあけう
味噌部屋と山よ斤く蔵を麻
神陸ハ遠ゝ先の産物
ふ男ら伊勢ゝ雨後嗣ゝ結
後妻の新ハ杜風の連
葛生や海へ半れむ焼を腐
淋しくとわれ出ゝ弾板
後人を中後ハ皆移ぢ種合
人影ゝ多き蔵りの

俗を紀の吉乃　砂糖屋
叶ふ又い清水恵業　〃
大ふの月もめてる迄い的　〃
うんを西ふ西ふが的ふ　〃
伊吉れ家数張い秋を知り　〃
泥をこ於ぐる百姓の秋　〃
十月のふを家よ唐絵画　〃
数うちまして行列よふ　〃
細ふ新ふ方戸明る庵の家　〃
帰ふふ摘蕪ふ英れ砂　〃

十市廟の一集
下れふ

梅咲や芦夫家家平　男蕪　京　机墨系　寄鈴
波の数ふふふ春風　鳥啼
伊保濃の寄を揚枝小盤屯て　後濃
古礼強の時よ冬ふ冬ふ　細車
ほんのふふ月の出ふ波のふ　板江
躍の下ふ新ふ伊達ふ一組　八公
京保のふふを新ふ数の時　百蒙
情も船頭も同ふ知立　扶支

嘘といふ事なくハ肩尾茅屋
流石いにしへ美人　姥明　和扇
接如ハおくさも富士　杜鵑　芝月
ゆくさくさまきて續く鶴を　夕可
俤駒し濱豆を拾ふ松ぬ山　忠流
中中見え高ふ蒲茅　志乎
被見て姿ふ月乃雨俤ひ　雪峰
夢ゆかとり秋吹ぬ竹根　片碁
庵の向ふ山ハ玉の小さつき　亀旅
老阪青くふ蕨乃翁茅　南峰
一賛

二

祚の代のお撰なるゝ人合歓　敬之
ゝ免おつゝ小物の慇懃　英峰
茅屏の茶摘し子拾ふ　紀漁
源氏の版時堂中ハ楽　晴山
為降屋れいゝぬ毎乃蝶　茅綱
濱世を拾くん半ぬき　一之
面白見え上ゑの所を撰　顔山
手をかぎへて蓼ゑ風　可梁
色うえる松ぬ女松ぬ松ぬ合　茅外
玉腐の味を保ぬゝ肝　茅青

和尚の歌を通ふ高ちの
半四ちの行く世界哉し　奥深
ウ
云の繁よ雲の射出ぬ十丈滝　雙竜
河内為ちをりん野ふ瓦山　含雪
弁当を開く二人も池の鷺　一蘆
柳撥し仕く佛ゑ限る　筆雷
鶏鳴の寺鐘の音も稀に下萌　岩ふ
明ちの色も稀に下萌　魯水
自笑

四季の混雑

須广、鉢の形

牧カ原　芦のまろ孫の伽やろよ　洛　南畝

四季

雑巾絞て乾す雑巾　富輪連　仙湖
かへるも陸平上ちく史京　彫山
待月や的ヶ丘は関と合ふ　烏峡
又月日のとやとなる世の子　嘯山
新ちく世ハ世の何ちの宋和尚　笑月庵　渋澤
山畑の稗ちの出る村　鈴泉舎　杉江

四季

春雨や降るもおしむも嵐山　洛　寄鈴

坊がてもれる宮やあるべき月哥　〃

織姫ふたもとゝ紅葉やゝ園る　〃

呼よるい影かな　茶吟　〃

異命あるゆゑ古ゝ能

根柳や川ゝと積るしら雪　洛　牙陵

雪も来つゝ人風雅梅ゝ　〃　九穂

川遠しゝゝの風音蟬の声　〃　大牙

歌仙

春雨や蛙一日毎日和ふり　京　羅人

物見れば小ゝれ連翹　公扶

蒸食法務服肉を吸くゝめて　乙澄

影の橋元掛ゝ極りん　重桃

きゝ付ゝ蛙ゝ孤つゝと朝の月　稲記

接雁ゝ素ゝ小ゝ草　兼任

物のゝもゝよゝ降りて雪ゝし　蘭中

志ゝ行ゝ箒ゝ沉ゝ　牙陵

るも損益を損なる奥の院　英紙
舟より出たる義　傳博　金下
又を考へ問よりおるゝんあ事　出所
庫裏ふを考よ抜き一所　陸馬
蓑の内ハ御ぞ考つゝ蓑衣　輝風
ふ知ふもまるゝ切る時　雁人
行空の志ゝむハ城元志摩の考　泰信
かゝゝそやいの身よ樋の酒　出所
花嫁ハ又人ハ寸考ゝ考を　月院
車ゝ吹ゝゝを考嵐　乙隆

二

訳け申る松を戻さ又経中　重桃
玄孫所の愛染寺納　編記
二ゝ人ゝゝ嘲を考まり　金下
妹を吹ゝふ者れなゝ嵐し　蘭中
意ゝの力ゝ考ゝ考ゝ　貞玉
七千万ゝ　程十足　英紙
我寺ふ今報ハ孫兄も兄さ小さ　廣信
絶ゝ源ゝ源ゝの寺小や後　輝風
かゝゝゝふ羅あゝる神樂堂　乙隆
叶表奥せんゝゝゝ千　雁人

和歌うらもとうら稲てさくらかさ　牙隆
いはもとうの花をもて梅ちる肘　貞玉
菜ハ姿ゑ菜ハ菜ゑ念入ル　英信
井戸の水弱れ川へちるく　北戸
老人ハ寿してゐる屋の壇　蘭中
待合ルうなぬ矢はゝ　金下
花梅ハ紅苦ゑ上京——合　陸馬
行ふゑもゑ文社ロ井　重桃

四季

梅咲や晩ハ傾城光脱ち　洛　竿秋
ゆきをつを和吉の落れ杜宇　仝
ゑゑ中隠の乃ゑもさうこ　仝
ゑゑゑゑ卯を綾り竹ゑ香井　仝

御供

御供

御供

細源

屋根瓦へいこの巨燈籠　洛　几山

同　雨

いしくろのしゝ表や鍋る山　仝

七夕

牛ハ中嶽の　丁雨

たちゝ丹波

七夕

吹簾く柳塚や星の晩　菓叟

くゝ鶴の隙ほとゝぎすの調こゑ　仝